

お互いが

苦痛にならない存在となる

樋野興夫著

いい覚悟で生きるより

対話により、お互いの境遇や人生に学ぶことと同様に、沈黙も、大切な時間として受けとめて過ごしましょう。

がんを抱えながら生きることは、並大抵のことではありません。死への恐怖と不安、痛みへの恐れと不安、抗がん剤の副作用への不安、経済的な不安など、大きな恐怖と不安がまといついて離れません。

それでも、たとえば、がん哲学外来メディカルカフェに通ってくる人を見ていると、明るく元気です。がん患者だからといって、四六時中、苦しんでいるわけではありません。おしゃれをして、仲間とおしゃべりして過ごす楽しい時間を持っています。

ある芸術家の方は、治療を受けながら地方のアトリエで制作した作品を、都心の会場まで定期的に運んで個展を開いています。

会社に勤めて仕事をこなしている人もいます。旅行や登山を楽しんでいる人もいます。周囲は彼ら彼女らが、がん患者であることを忘れていきます。

こうしたがん患者さんを身近に見て、「あの人の強さに学ぼう」と思う人がいます。

がん哲学外来メディカルカフェの役割の中に、「研鑽」があります。語り合い、お互いの境遇や人生に学ぶのです。それだけで、患者さんたちは十分に他者のために生きる、という使命を果たしています。

もちろん、皆がみな、明るいわけではありませんし、初めからそうだったわけでもありません。話すことが苦手な人だっています。初めて足を運んだ人は、カフェの雰囲気にとまどい、話しかけられても何を話したらいいのかわからず、黙ったまま過ごすことも珍しくないのです。だけど、それでいいのです。

「研鑽」には、長い沈黙の時間を共有することや「お互いが苦痛にならない存在となる」ことも、大事な課題と考えています。

患者さんはがんになると、「こんな体になってしまっでごめんなさい」という気持ちや、「家族に迷惑をかけるはならない」という消極的な決意を持ちます。一方、家族も、つらさを代わることも、病気を直接治すこともできない、無力感に襲われることがあるのです。互いにそう思っていたわり合っている、不安を消すことはできないから、「これでいい」と言ってくれる人を求めています。第三者に、ありのままを認めてもらいたいのだと思います。

そのため、がん哲学外来メディカルカフェのボランティアスタッフには、「研鑽」とともに、スタッフの 3 か条も心得として繰り返し話します。

- 1 品性。人生の目的は品性の完成である。
- 2 使命感。偉大なるお節介症候群の症状を持つ。
- 3 犠牲を払う。自らは犠牲になっても、心は豊かになるものである。

自分のことだけを思い、自分のためだけに行動するよりも、自分が他者から必要とされていると感じたときのほうが、喜びははるかに大きいものです。患者さん同士は相手が必要としていることがより理解しやすいでしょ

うから、余計なお節介さえ注意すれば、互いに喜びを分かち合えるでしょう。家族は患者さんに与えているように、実は喜びを与えられていることを、不安になったときにぜひ思い出してほしいと思います。そして、スタッフや医療者は、「ありのままを認める」ことでさえも、患者さんと家族を支える喜びになることを感謝したいものです。

カフェに集うがん患者さんにとって、時間はかけがえのない大切なものです。その時間を共有する場では、新渡戸稲造が引用している「奥ゆかしさは最も無駄のない立ち居振る舞いである」を実践していくばかりです。

